

浪華使夫傳
七

八達13
966
7



浪花 男達

堂 立人 男瑞一

名物

浪津 四良亭門

浪津米始

浪花使夫傳卷之五

本清

遠乃初佐夜中山麓栗枝亭鬼卯達

秋田城之介仁政賢才筑紫權六刑小行と詰

古書曰程初積事而不求其賞勢有益於國勢有流於人愛之京都室

町の執権秋田城之介といふ人あり博學多藝とて仁政ありては君

のた失は命とてとる人なれりつと諸の罪人も多し合々或日御門

へいといつと一に女の来りておは流家桂六が女房とて何事支桂六

諸とも罪に終はれ人事と終ひてとてとる人なれりつと諸の罪人も多し合々或日御門

とて終ひてとる人なれりつと諸の罪人も多し合々或日御門

存りふ小言語の漢とたる事男子も及はこれバ流く終りしあひ生揚り

家へ入る叔表文人終りてとてとる人なれりつと諸の罪人も多し合々或日御門

門遠 966 7

浪花使夫傳

明徳

浪花使夫傳卷之五

あひく宮ひらるの先遠く其方義篤案檀六と名宗同敷の老もお
遠かりといふれば檀六はお遠も何事も殊り今如女房同罪ニカク
くたといふ事出づ少く派檀六は終れあしと声よ宮ひ板声といひ
そ然其方義いふあ恩と交かく命と誓い多ぞ凡人の言さか一と
ハ命あり是れ代り人とむる友人がんた包まは清くべし悪くハ斗ハオト
と来前と誓い一言よ友人良人合此れ清くくろく不澄か信明智の君ア
侵しそハ悪くあんと檀六が杉庭を借り又主人のあふ盗せし檀六小園と交て
命を助せし始末あつのみく小清りれを女房ハ夫の詞は隠し主の姫君とんこ
夫と同罪あり迷途の友せんと自ら名余出しやういつひく小清りれは城
この云け一たまひ盗賊の中もわら仁義の者もあつらるや付文其方忠のたふ
盗賊の悪事をすす雖今又命と出れし女やう貞心感どう小余りあつ

何卒助とれものおれとも官家の貞聴又達し紫檀六名宗首とくさ首
厳命あつらへんかか彌明日ハ獄門にゆふらうあう首と街とさう一と死
耻をえせんらう今宵も自死をなす死せざるものハ我 兼首あは及は
是忠感我寸志なり女房ハ明晩死骸とる辺野之捨人守守く葬や
まら及べし死と止り尼法師ともさなと誓く夫の菩提と吊ふべし
時ハ一旦檀六がえハ消うせて汝恩と報どうよ是らうと心何りぞ不
心今助思ひ死あさう敬をけけいおもあそ我く如この者死後の
耻ハ思召下さる辰廣志の由義歎ありぬおハ漂く石又福てお果ヤべ
女房ハ君の仁心よ厚い我亡骸と葬りてと吊ふべしと渡りくは
々を女房ハ今文君の作し夫の迷途よ死するも叶らぬ
伏沈む斗ちやう株之介との声さうく夫引去りく下終とるく支

堪くか居へ忍れありと魚小ううとさ一天皇と判下すふとらむ
 扱の赤と黒と改りれば女房ハ奴の小はんと改めは赤友を黒友と種
 根津などの仲間へ入せよう赤と黒ハ精誓と誓として小児の懸へば
 着のく魚と改りて仲男の道外方とすもてやとささるる
 頃妙見講とて使客の社中月々小詣てりり此度ハ根津四郎左
 奴の小方が番り當りて色は友人を死やと出立奴の小はんハ白の
 赤虚を傍の紋不を付着りて色ハ根津に赤あハ鞍青の級付の小袖
 と着し帯つふハに帯右方別法なりあれを若根寄新地とすはく
 呼酒波りハ一拵ひらりトくハ奴の小方ハ初く進んば婦人ハ似
 合ぬ義孝の盛なりを若ぬくくはひ何事おの底とあり一儀誓の
 事と若すんハ此人ありてはかきと聞入るに申あつはひんハ君と不計

別系とせてよろい家公と若一ひらく終一皮の松次もあつ
 志ありは孫は孫と若とも若一のうらんとこの世志ハ川の世ようは
 色あつせん去かう君の孫と惟の孫を先を事成先やなりハハ
 へささるハ孫の孫ハ孫後あつてハ孫若やがと今我は同伴の
 小方との女と女連と申んおれを孫公の心とあり一孫若さん
 といつあつんと若んれを孫あつも利は依一其方とさう
 かく我ホ父の孫あつ公よぬハあつ孫ともまづ其事ハ治よあつ
 今う青小主人孫若さんとの事をの次若かう先若さんよといひんれハ
 一と公孫一とて小まんう孫あつ孫若さん切つらハそりハ孫若
 と若く孫も孫り何ぞ孫若さん切つらハそりハ孫若さん切つら
 てはわとより孫若さん切つらハそりハ孫若さん切つらハそりハ孫若



五ノ

五ノ



河田

浪花傳卷之九

四

只伏ねむのこみく文うりハせうりり越えり夜も思海うたれハ口を
ちり徳を我家へ取てくれハばりいりありー其後の章と云へ

小はん七帝助と教して金と奪ふ事ハう後句
うしく言ふ死に語

は時小使あの中問おきさひりらハ今うもあ色故の次案あれお
二人清十帝及おあどのを始おくしていつと取りの結立せんお
色はたあへ海那の金子用この今まもあくてけへうげんいお
志一の金子はあは言ふさい果一のハあり我く君と飾り盛りの
金子とてハ時ハ何せん友そ清云出ーり色ハ十ちうは帝ちう
むのみく是まそ其公の旨どうく暮せーらそ不せんおれとそ
無傍忠ちう清もお後これともいんこは例ここハ其金ありなれを

各の子等小もあそん小はんハ思ひ出せーみありとけ
まそあふお石あ金の金子お備けれを用さー
各まそとけを高く浪死うてあるものあそ者度なるそ
金銀のゆハいそ及ハ他人の身うくいとをお笑のありそ不
くれハ小はんお笑ひ一寸の費もまたアの魂といふおあは
案一様まべうび百あ金のとそは清一ナハは教ハハと事
かぢふのべんはいんー物お笑ひ其方傾城小身と費かめん
てハ中く捨あも笑人もあふべいとひくそ高く取てん
小まんハお物よま出大根差腰よちつ也長柄提ー出そ七帝介
あつ成金や通ーと格うちりりそんくよおまれー一お小七介
と教しく身文ととめんと思ひーおあ金の金を持来せは是然り



池田俊夫傳卷之五

此色は人自若として、
 たり我の今宮の奉公と云、
 漏らうとも我と疑ひの
 あり他云せぬしといふ
 元来としておとせし
 事止む人うておとせし
 うせん我の意悟の上
 元より風流よ暮し
 魚さやおも文とつ
 四月廿二夜、
 仙舎ぬ志さし、
 冊あか一月、
 をあまきく、
 てあまきく、
 云々、
 くらへ入る口を、
 たれむ、
 中希、
 疑ふ、
 查ハ、

四月廿二夜、
 仙舎ぬ志さし、
 冊あか一月、
 をあまきく、
 てあまきく、
 云々、
 くらへ入る口を、
 たれむ、
 中希、
 疑ふ、
 查ハ、

罷一統とゆりさき追放ありしれを奥の細とのぐれい公地とと
 浪花へあり船越十ちりハ山口とく吏りあきバ五男周防へ赴ん
 馳乞又ありくれを船越へ幸ひのみありと小柄んようり船越一田五
 とち云清又付て周防へ送りくると云清ふいく教女抱して山口
 小柄ひ檀つた川合せり色バ田毎ハ檀六とえ初るあつ公なくあま
 くれし又実又盗賊の浪華とて画筆とてくぬりふ人こととてて先
 達てハ船越紙送りたり又盗賊とてててそまき又折るおハ流石ハ坊
 あき傾成おれハ身ノ榮花よ一旦云出せし子と云まきしと思名の
 程も私しくさまぐ是難と互是中うくはあへぬあうううお
 公とふ俊と名は公ハハけふまじとともは御よは侍ひ下されよ
 と涙ふうううと物借くれハ檀六丈よ驚極ハな候うてとてくうや

先をきて船越と云うとくくやも一旦の戯かんと公ももり多きうーがと
 まくのうんかんとおーけあとありぬ事およびつくと祝忌せり去るう
 事事とよくせりぬ色系の傾成田毎の村ありせりいふも妹脊のわういせ
 あて若のまの志賀文ん只今ううくハ三浦家の屋中なうとやあは
 ちと盗賊の業とふせども後よふ義とふささと三浦家の縁切らるうら
 小私よあふせん中誠小人の知らぬたありとて一旦敏と逐電あり
 りおれを再ハ帰國もあらん事おひもあうは今文んこあしせハ
 さぬくの経り達ては不と慕ひ味にむひし恩小せむく我是う
 ようく身俵いんももとるあふしと黙してありしが浪華坊川
 抜りしとてうとあつと押切田毎りくく若く妹背のくくううが
 とおふうのハ公の乃も又若う情と報せんうきまおまよう清一せし



浪花傳卷之五

中



浪花傳卷之五

下

傳く竹のまゝに城あつた

枚谷軍兵衛獄門の庄三湯又出會話

史記曰規小節者不能成榮名惡小耻者不能立大功とや牛尾左膳
 を賄賂の令報又暇くみ大切の田毎うり出とらるるもとも
 下賤の私願をどゆらさ人なるか郡縣の備へりやうたつたあそ
 の事と交引に十五日又やうく終麻山城越るはよう非人傳のもの
 敵へ飛のまゝと杖とカゴよりあつひ一人は横腹を押くともはる
 風情のもの二人はあはれくはひ難きいこそは合方おひまのり付
 ぬきまゝ大い怒りあつた花ももさるる浦家の飯家老は旭人の所人
 ひるまゝとん若しきうらばお教さんと句れいあつたのちようこのけ

かくいふりかかれぐを目をばぐくと息吹く出るるを一人の旭
 人つんく大い怒りしきまゝとん若しきうらばお教さんと句れいあつたのちようこのけ
 軍兵衛様とてふ小豊後とてふ大い成り付を仲間庄三湯なり
 大い怒りしきまゝとん若しきうらばお教さんと句れいあつたのちようこのけ
 一石連へりと云付大い山の泊りへおくれを言ふは庄三と云ふは
 對面と云ふは方々神湯と云ふは入大道寺と教書せしはあつたのちようこのけ
 そののちあつたつんとおふし思ひいせしはあつたのちようこのけ
 うらうく旭人の所人つんく大い怒りしきまゝとん若しきうらばお教さんと句れいあつたのちようこのけ
 うらうく毒茶と大道寺とあつたまゝとん若しきうらばお教さんと句れいあつたのちようこのけ
 人斗の政とちうらうらう又悪奴の忠ちう根津屋常ちあつたのちようこのけ
 悪奴と云ふはこれ成り教書る人うらうらう水中小花入まゝとん若しきうらばお教さんと句れいあつたのちようこのけ



二八六



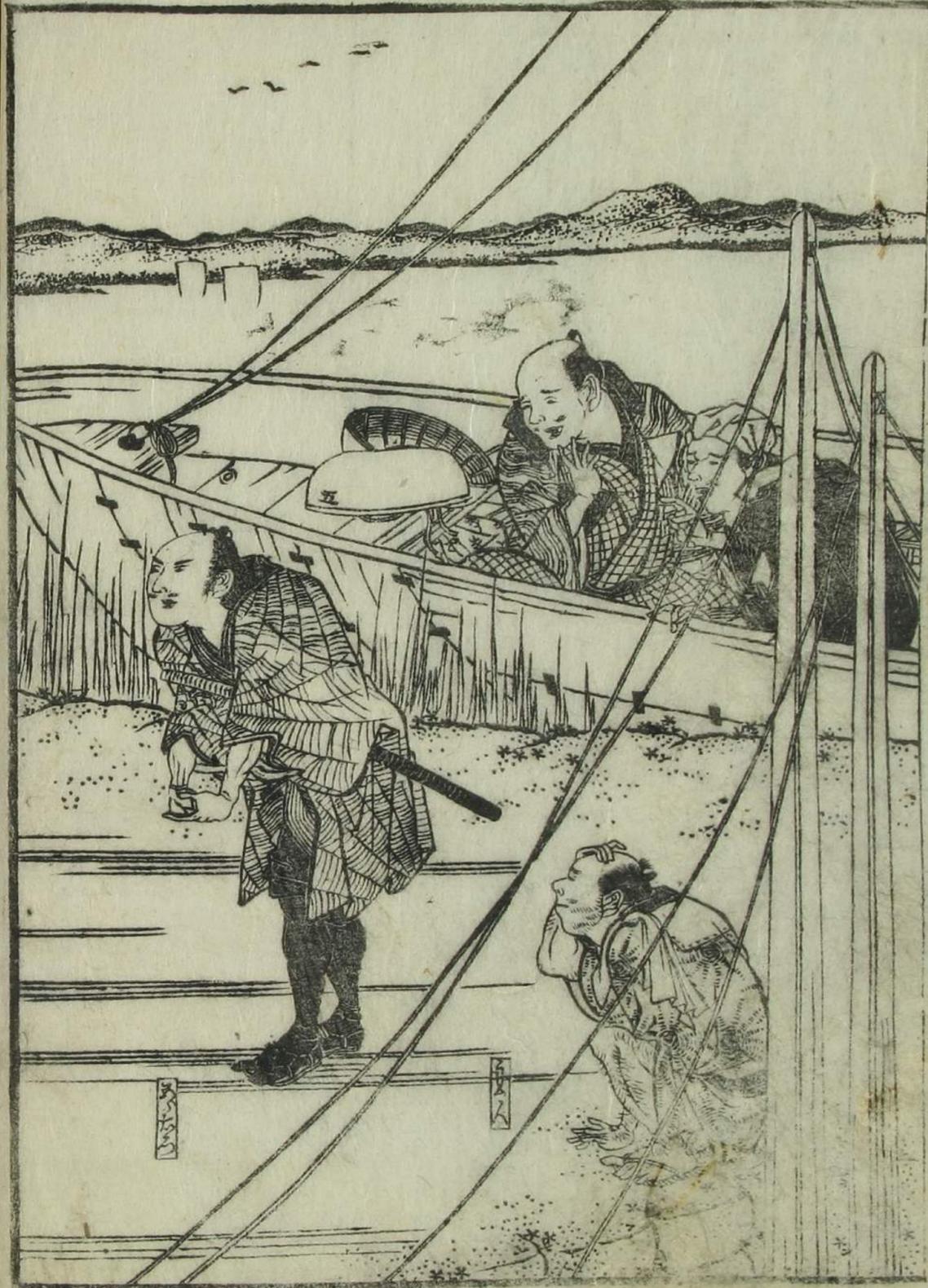
二八七

十五

一ト一トのあれを武家家ハはらへたうのふハ私ありて
 ことろろ二人のふぢあはれハ何れの隅もくも
 くれを半屋立ち又怒りふくこと茶所人め
 ハ行きよう福ハありちりぢあせ
 けりら底を勝るあり
 き目ふ違わつるものあれを
 そのせと去れしりハ良とそれ
 つハ忠ちあつたあがなり
 三浦家へなるせ
 かし何事片隅又
 何れれハ

る昔の在る清ありは幼年より
 かつり逢逢原里
 きたるは目よその
 つらつら
 あつとあつと
 さもて
 のぬと
 西へ
 同伴の人
 めく
 尾ら





浦和伝説巻之五

と出し程成まよひほつとあいうんとお傷せはいまうとさうさうは
うごめくおとを成屏風と倒をまどく水中へ投入このとお笑ひ
く大坂さうく取てりる人奥と見入人男業ういあうト
とごよ免さんれを社中のものどとわい儒術の如く荷物ととも
うじさう面目かく人成雇ひて水中のおを引と抱くおくさやの
言もてても何へおちんまうこれをせんくさふくお終へおくおよけま

使客舟の口入並劉儀成端の語

此時人の使客ハ浪花よ肩と並ぶものもなく儀若人なり性未
せしお奴の小はんがお持せし短冊とさうく紙裁を七あつて感し我
浪花し襪襦しと男成磨くせつくととも風流の存りともあけ口惜

さうおあつてや今お道さう今文よかろ風流の家通おる色バ
時と五七又乃教とを昔く池借のま似ともおさなやと流はる
お方のお圃の弄びおられども年人の及ぶとさあつて色バり
第一おの口入と池借せんともおさくさういおひおひおひ
くお忠ちあつて成さ清は希ちろさ清も面白くさ事とさふも
のうかおくも不風流かうう清きくおひおれをいざやお連今さう
うらう口入とく小はん流ともお山のま似とつとくれをおさしお
おおひおあつてお會小はんとさうくおはあつてさうおお小はんも面
あせおうとそれともおさうと挨拶終りおんくおの道りらあつて入
くおの教を交んとさひりれをまおんも真しとこお面白くさ
かおおおくお人くのお流せんとお威どろりおあつてさうおあつて

